

吉川敏子著

『氏と家の古代史』

(増選書 118)

塙書房 二〇一三・一〇刊

B6 二〇八頁 二〇〇〇円

本書は、著者が長年研究している日本古代の氏や家について、その本質を明らかにすることを意図して著されたものである。八世紀までの氏や家を様々な史料を用いて多角的に検討している。構成は「はじめに」を除いて七章で構成されている。IからVまでは、時系列に沿って氏姓制度から大化改新後の氏の変容、そして律令制導入後重視された家について論ずる。またVI・VIIでは氏に関わる具体的な史料を取り上げて古代の氏の実態に迫る。以下に各章の内容を取り上げて紹介する。

「I 氏姓制度から見る氏」では、『日本書紀』における氏の祖先伝承記事や屯倉設置の記事を検討することで、大和王権がどのように支配を進めたのかを論じる。

「II 古代氏族の系譜意識」では、「稻荷山古墳出土鉄剣銘」「天寿国繡帳銘」を主な材料として古代氏族の系譜観念を検討し、従来父系と父母両属性の間で議論されてきた氏の属性原理について、父系でつながる血縁集団であったと述べる。

「III 氏姓制の再編」では、大化改新から律令制導入までの氏族に対する政策について論じ、氏の持つ親族集団と政治的集団の二

つの側面のうち大化以前には後者が大きな意味を持っていたのに対し、大化改新後には政治的集団としての側面が後退していったとする。

「IV 律令制と古代の家」では、律令制導入後の家に関する令文を日唐比較も取り入れながら検討し、律令制導入に伴う氏姓制度に基づく支配体制から官僚制への変化に対応して、律令制下では氏よりも家が重視されるようになったとする。また、従来言及されてきた氏と家の関連性についても、氏は父系でつながる血縁集団であり、家は家長を筆頭として異姓の配偶者をも含む世代ごとに再編される集団であるとし、編成原理が全く異なるものであると述べる。

「V 八世紀の氏族の様相」では、具体的な氏として大伴氏を取り上げ、大伴氏と他氏の姻戚関係を検討し、律令制下の氏は氏として結束を強めるよりも、自身の官人としての地位のために有力者との縁戚関係を重視していたと述べる。そしてその背景は、律令制導入によって重視された家が不安定であったからであるとする。

「VI 稻荷山鉄剣銘の系譜の氏族」では、再び「稻荷山古墳出土鉄剣銘」を取り上げ、稻荷山古墳に埋葬されたオワケが膳氏であるとする先行研究を評価した上で、『日本書紀』に見える膳氏が外交・軍事に関わっていることと関連させて、オワケは軍事力の強化を任ぜられて一族で武蔵に下向した皇族氏族であったとする。

「VII 古代丹後の海部直の系譜」では、京都府にある籠神社宮司海部氏の系譜である「籠名神社祝部氏係図」「籠名神宮祝部丹波国

造海部直等之本記」を比較検討し、族長の地位継承系譜とされてきた「籠名神社祝部氏係図」は父系系譜であったこと、またそれぞれの系譜の関係性等を指摘する。

本書は増選書であるため、比較的やさしく書かれてはいるが、著者の研究が余すところなく盛り込まれており、先行研究の整理や史料批判・解釈も含めて充実したものとなっている。また、著者作成の氏の系譜・姻戚関係を整理した系図も有益である。

著者も述べているが、氏・家の研究は、断片的な史料がほとんどでありさまざまな性格の史料をつなぎ合わせなければならぬこと、また氏・家といった概念は統一的な見解がなかなか得られないことから難しい面が多い。その中で、著者の氏と家の概念が明解に示された本書は、関連分野の研究者はもちろん初学者にも一読を勧めたい。

(武内美佳)